

★春高記録の価値

現在の春高記録保持者には、インターハイ、国体で「入賞」している選手が多くいる。記録的価値の高さから、全国大会の決勝で高校新記録などの大記録とともにマークされたものも数多くあるのだ。

(以下はマークされた大会ではなく、保持者がどの大会で入賞しているかということ)

100m、200m (2006大阪インターハイ)

400m (1994国体少年B)

110m JH (1964新潟国体)

110mH (2005千葉インターハイ)

200mH (1965大分インターハイ)

400mH (2005千葉インターハイ)

400mR (2005千葉インターハイ)

走り幅跳び (1978滋賀インターハイ)

三段跳び (1961静岡インターハイ)

棒高跳び (2000岐阜インターハイ)

砲丸投げ12P、円盤投げ1, 5kg (1984秋田インターハイ)

ハンマー投げ (1960神戸インターハイ) (1993静岡インターハイ)

5種混成 (1977福島インターハイ)

10種混成 (1964年大阪インターハイ)

春高記録とは、ひとつの県立高校陸上部の歴代最高記録である。とはいえ、さすがにレベルの高さを再認識した。

春高記録を更新するということは「全国入賞相応」の力と価値があるということだ。

それら輝かしい選手たちの末端にいられるということは、我々同じOBとしてやはり誇らしいことであると、再確認した次第である。



2005千葉インターハイ400mR決勝  
大阪高校・金丸選手と後藤の戦い

高跳び、幅跳び、三段跳びの記録はこの二人の怪物ジャンパーによって相次いで打ち立てられた。三段跳びに至っては半世紀が経つが、更新すれば現在でも全国総体優勝は十分に可能だろう。



## ★1965年大分インターハイ200mH決勝。

このインターハイには、1年生時ですでに入賞経験を持つ大木正美先輩が登場。

(春高創部90余年のなかで、1年生で入賞したのは大木正美さんのみ)

主将として獅子奮迅の活躍をし、再び200mH決勝の舞台に立った。

2年生の時は故障でインターハイは断念した。秋の国体では2年生として110mHで入賞し、復活。3年次は主将として完全復活、リレーでも優勝を狙う。

400mRでは予選で43秒4の当時高校新記録をマーク。決勝でも見事43秒6で堂々の5位入賞。松沢竜一、大木正美、金沢良男、木戸修二先輩で臨んだオーダー。

(ちなみに翌年の400mR優勝記録は43秒6。)

春高初のリレー全国総体入賞であった。

関東ではリレーで数多く優勝のテープを切ってきた春高。しかしインターハイのリレーで入賞はこの年までなかったのだ。本番での入賞の難しさを表しているといえよう。

この1965年も関東では400mR 2位→インターハイ5位。

1600mRは関東優勝したが総体は入賞はできなかった。関東での優勝タイムは、インターハイ6位の記録を上回っていたのだが・・・

・・・インターハイのリレーは魔物が棲む。これは常連校ならだれもが覚悟している。ランキング通りにはいかないものだ。



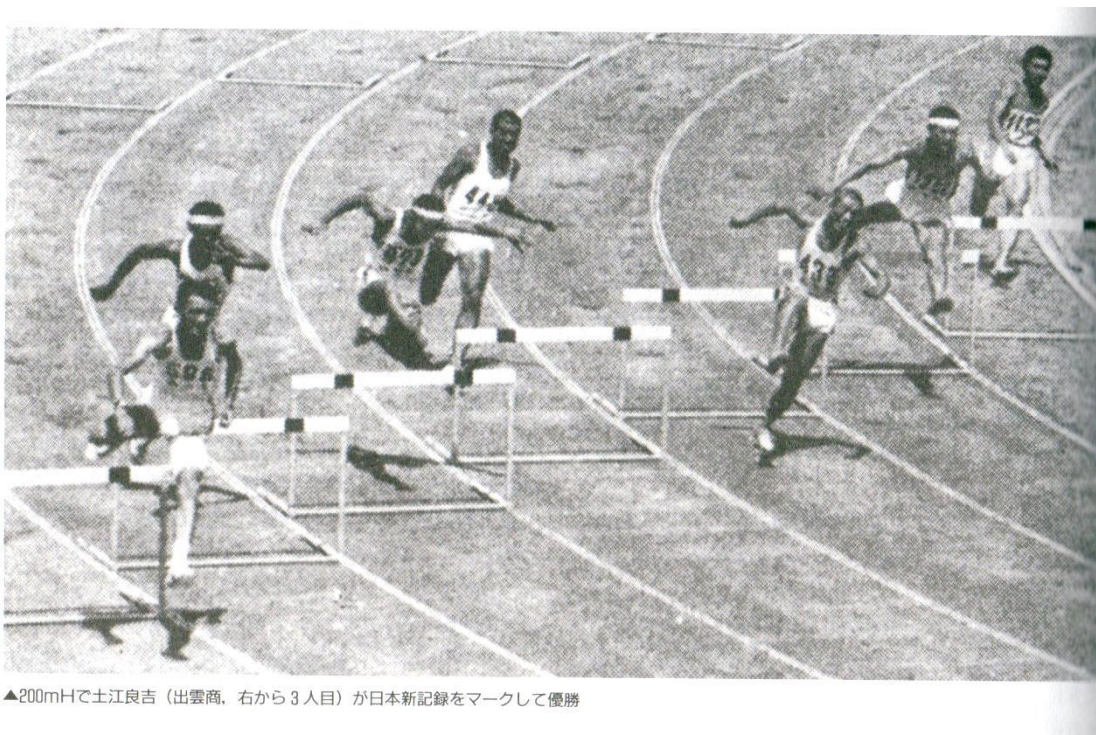
現在は埼葛陸上トップとして陸上競技の普及に努める。  
多くの子供たちに囲まれる正美先輩。

迎えた200mH決勝。

このレースが高校歴代最高のレースになる事はまだ誰も予想してはいなかった。

3レーンを走る土江良吉選手は昨年の優勝者。そのうえ100mでも2位につけるスピードの持ち主。予想通り爆発的に飛び出した。大木先輩も食らいつく。上位3人が24秒台の高速レースとなった。

- 1、土江良吉 24秒3 (日本新・高校新・大会新)
- 2、吉井和明 24秒4
- 3、大木正美 24秒9



▲200mHで土江良吉（出雲商、右から3人目）が日本新記録をマークして優勝

大木正美先輩は見事に1年生で6位、3年生で3位を獲得した。

この時の優勝記録は1971年に400mHに種目変更されるまで、更新されることはなかった歴史的なレースであった。

この土江選手は勢いに乗って200mの日本選手権も優勝。

ちなみに翌年のインターハイの優勝記録は25秒1・・・強い選手と戦ったから出た好記録でもあろうが、1年ちがっていたら大木先輩は優勝できたのになあ・・・と、私は素人らしい思いを巡らせるのであった。

高校新記録との戦い その2へ